



会員 小宮山 優樹

東京お風呂事情

1 はじめに

早いもので、弁護士登録をしてから半年が経過していた。徐々にできる仕事は増えてきたと思う。依頼者の方に感謝されることも増えてきた。

思えば、この業界に身を置いて以降、公私を問わず、「新たな出会い」というものが著しく増加したと感じている。もともと、人と話すことは嫌いではない。知り合いが増えることも悪いこととは思わない。こうした状況自体を心の底から歓迎しているし維持していきたいと考えている。

しかし、今のこの状況に自らが疲弊していると感じることも事実である。うろ覚えではあるが、昔の心理学者が、「人生のあらゆる問題は人間関係の悩みである」と言っていた。これが正しいのであれば、人づきあいが増えれば比例して悩みも増えるのである。疲れるのも当然である。

ただ、この状況に手をこまねく私ではない。疲労やストレスと戦うべく、私はお風呂へ行くことにした。

2 東京の銭湯

東京に昔ながらの銭湯が数多く残されていることは意外に知られていない。インターネットで調べればすぐわかるが、東京には個性豊かな銭湯が今なお存在している。

私が一番気に入っているのは、高級クラブが軒を連ねる銀座8丁目に忽然と現れる「金春湯」である。金春湯は、番台があり、富士山の壁絵が描かれ、男湯と女湯の壁越しに先に出る云々の会話ができる、皆が思い描く昔ながらの銭湯である。驚くべきことに金春湯は約150年の歴史があり、浴槽横のタイル絵もかなり古いものである。所在地こそ煌びやかであるが、銭湯の典型ともいべき銭湯である。ただ、金春湯の脱衣所にある返却式コインロッカーの開扉には注意が必要である。ロッカーの100円玉をホールドするポケットが浅いためか普段通りの感覚で扉を開けてしまうと、返却され

た100円玉はほぼ確実に床へ飛び、脱衣所へ軽快な音を響かせることになる。ゆっくり開けるなどの対策が必要である。利用者が金春湯初心者であるか否かはここで判断できる。

次に私がよく行く銭湯は、銀座1丁目にある「銀座湯」である。首都高の桁下にある内装が比較的新しい銭湯である。男湯と女湯が2階と1階に分かれているためか浴室は広々としていて気持ちがいい。壁絵はタイルで銀座三越のある交差点を描いている。このタイル絵は、消失点が複数存在しパースが崩されていることから見る者に不思議な違和感を与える特徴的な絵である。

他に私が好きな銭湯としては、中央区湊1丁目にある「湊湯」がある。湊湯は、壁絵が一切なく、かわりに壁全体が黒を基調とした大き目のタイルでおおわれている。そして銭湯らしからぬ一番の特徴は、ふんだんに間接照明が用いられていることである。黒のタイルと間接照明により、シックで洒落た大人の空間を感じさせてくれる内装である。入浴料とは別料金となるがサウナも利用できる。銭湯らしからぬ銭湯としては際立っている。

3 結び

私としては、他にも紹介したい銭湯があるが、紙面の幅の関係上、上記にとどめたいと思う。

私が、銭湯に行くことの第一の目標は、大きな浴室を利用することで気分をリフレッシュさせることである。また、都内各所の銭湯をめぐることも、ちょっとした冒険気分を味わうことができ、楽しいものである。もし、近頃、鬱々とした気分が苛まされている方がいるのであれば、試しに銭湯めぐりをしてほしい。きっと、気持ちを新たにできると思う。

私自身、今後も、銭湯めぐりを続けたいと思うが、一つだけ銭湯業界に対して不満がある。もしかしたら、合理的な理由があるのかもしれないが、どの銭湯もお風呂のお湯が熱いのである。もう少し温度が下がらないかと密かに願う。